

話題の本

著者に聞く



飯館村からの挑戦
自然との共生をめざして

ちくま新書
940円+税/318ページ

2

011年、震災で福島第一
原子力発電所事故が起きた

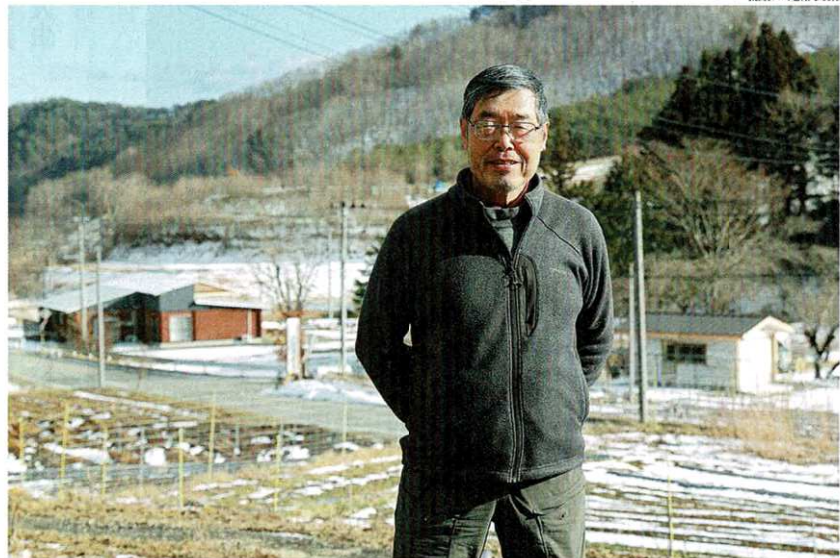
際、東京で引退生活を送っていた著者は、研究者仲間とネットで連絡を取り合い、被災地へ向かう。以後、福島県飯館村へ放射線測定や除染に通い、17年4月、避難指示が解除されると村へ移住した。

—— 事故2週間後に向かった茨城県東海村は混乱のさなかでした。

物理学をやっていた身として、何が起きているのか純粹に知りたいう気持ちでした。僕自身4歳の時から、広島市の隣村で原爆を見ているから、放射線には因縁があります。東海村の日本原子力研究開発機

各自が知識出し合って わいのわいのやってきた

撮影：尾形文繁



認定NPO法人「ふくしま再生の会」理事長

田尾陽一

たお・よういち 1941年生まれ。東京大学理学部大学院物理専攻修士課程修了。数々のIT企業を経営。セコム取締役、工学院大学客員教授を務め、社会システムデザインの研究など多岐にわたり活動。2011年「ふくしま再生の会」創設。翻訳書・共著など著作も多数。

構は建物が壊れ真っ暗だった。何も手が付けられてない状態で、事故現場に対処するのにデータが東京電力から送られてこない、と。原子力村の中枢に情報がないという、驚くべき事態です。翌日、高校の先輩で親しくしていた与謝野馨さん（当時大臣）の事務所へ飛んでいった。すぐ各方面へ指令が飛び、やっと回り出しました。

—— 各地を回り、原発から30キロメートルの飯館村に拠点を置かれたのは？
初めて飯館村へ入った日、専業農家の菅野宗夫さん（現ふくしま再生の会副理事長）と出会ったのが大きかった。息子さん一家は村外に避難して、じいさんと奥さんと3人、6月には牛を処分し自分たちも避難するということだったけど、「あなた方が来るなら、そ

の時間に私も戻って付き合うよ」と言ってくれた。田んぼ、山林、牧場、どこからどう着手するか等々、問題は山積み。でも一緒にやろうという村民がいるんだから、やっちゃおうという感じで。
—— 放射線測定や除染では、独自のやり方を次々編み出しました。つてを使って省庁に探りを入れても、彼らもどうしていいかわか

最大の原発被害地・福島から モデルビレッジを示したい

らなくて止まっていた。いつまで避難が続くかわからないけど、この土地は捨てないって村の人は言う。僕らはこの地に合ったやり方を自分たちで調べながらやっていくしかない。農学部もあれば都市工学、環境デザインやつるやつ、物理学もいる。みんなで知恵出し合って「こんなのどうだ?」「よし実験しよう」なんてやっていたわけです。例えば、田んぼの除染は水を張った表層5センチの土のみ攪拌し洗い流してしまうのが理想じゃないかということになり、草取り用の農機具を使って実験、測定という具合。そうして得た実験結果は全部公開しました。

「こっちのほうがいいかもしれないよ」と環境省に言いにいったり。——活動のモットーは「現地で、継続的に、協働して、事実を基に」。支援者・被支援者という関係にしない、という点も大事です。原発事故は被害者だけの問題ではない。原子力に対し批判的であれ、その電気を使って生活してきたということ。とは、容認してきたことになる。その人間が、現地で被害に遭った人々に対し、私たちが支援しよう、ではない。みんなの問題だから、協働してやるんです。東京から通っていたとき、帰り際、奥さんたちが「どうもありがとうございます」とか「わざわざ申し訳ありません」とか言うわけ。これじゃ続けられないなど。いやいや自分のためにやっているんだから。そんな会話もうよそうよ、と。

——村の人たちと対話が空転したり、緊張感が漂うこともあった。僕ら下素人がよかれと思って話し合いの場を設けても、裏目に出してしまうことがある。「言えない雰囲気ですよ」って言う若者がいた。十分に伝わらない。なかなか帰村できない、このままどう職に就くか、この先何が起るか、将来どうなるのか、皆目わからない。遠慮する村民に、上から目線でどうとうと自分の経験を語る参加者もいた。みんな初めての経験で、対話を成立させるのは本当に難しいと感じた。以降、村の人たちにストレスがかからないやり方に会合を変えていきました。——だいぶこなれてきましたか?

村民とのパイプは強くなったと思っています。手伝いたいという人を僕らはオープンに受け入れていたんだけど、中には研究論文狙いもいて、早々に察した村民が「文科省のお金がなくなったら、きつといなくなるよ」とか言ってくる(笑)。でも戦力になるんだからいいじゃん、って。若い人の未熟な発言も、勉強のうちってことでおおらかに迎え入れましょう、みたいな話を村の人としてしています。——現在も放射線量の測定を? はい。帰村を考える人たちの判断材料になるようデータの公表も続けていきます。個人線量計は現場で貸してくれるんだけど、みんな面倒で借りていない。それで僕らが線量計持って行って「110日間つけてくれ」と頼む。それを解析しフィードバックする。山に入る田んぼに出るなどの行動パターンによつて、どれくらいの線量になるか目星がつくようになり、自分で行動を管理できるでしょ。それと、将来子供たちが帰村したときのため、ひざの位置に線量計を着け、影響を調べています。——田んぼの牧場転用や花や野菜のハウス栽培支援、漆の栽培実験も始めている。産業構造シフトの手助けみたいなことですか?